

内 外 彙 報

ユーモルフ・プロス氏蒐集の移動 一年ばかり前に「シナイの聖書」を露國より購入して各國の當事者を垂涎せしめた大英博物館は、今年初頭、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館と共同で、支那美術品の個人蒐集として、質量共に恐らく歐米第一と云ひ得べきユーモルフ・プロス氏の蒐集を「國民の爲に」購入した。購入とは云へ、其の價格は、既に大英博物館に寄贈されて居る壁畫を除いて全部で十萬磅であるから、此の三千點に達する蒐集が市場に賣り出された場合の價を想像すると、其の半數は寄附されたも同様である。

英國に生れたギリシヤ系猶太人であるユーモルフ・プロス氏は印度貿易に従事しながら、一八九一年頃より陶磁器を少しづつ蒐集出したのであつたが、初めは歐洲ものを主とする蒐集の僅に一部であつた支那の陶磁器が次第に増加して、遂に東洋の陶磁器のみで千四十點、繪畫、彫刻、銅器、玉等全部で三千點に達する比類なき支那美術の大蒐集となつたのである。別に美術史的な客觀的價値を問題とするのでなく、唯彼の美感に訴へたものゝみを買ひ集めて行つたのであつたが、彼の優れた鑑賞眼は、その歐米の傳統と感覺の制約を超えて好く支那美術の眞髓を理解し、其の精華を凡ての領域に互つて網羅して居る。

先にも述べたやうに陶磁器は千四十點に達して、蒐集の主要部をなしてゐるのであるが、特に其の特徴とする所は漢、唐の名品の多い事で、之等は漢唐の陶器が初めて歐洲の市場に現れ初めた今世紀の初めより卒先して集められ、現在では此の種のものゝ最も優れた美しい蒐集であらう。唐以後の陶磁器も十八世紀初頭に至る迄、凡ての種類に互つて多くの名品によつて代表されてゐるが、唯所謂ファミーユ・ローズのものだけが非常に少ない。之は氏自身の趣味に合はぬ爲である由であるが、此の種のは多く十八世紀歐洲への輸出品として

作られたのを思ふ時、そして今も猶、ファミーユ・ペールと共に歐米人に好んで買はれて居るのを思ふ時、此の蒐集家の趣味が如何に所謂支那趣味と趣を異にした眞の支那美術の理解者である事を示す一事として特筆に値する。かうした理解には、或は彼の猶太人なる人種的要素が預つて力あるものかも知れない。銅器の中には周、漢の優品が多く、この點に於ても他の蒐集の追隨を許さぬ。漢代、唐代の文化は前述の陶器の外に多くの美しい鏡の蒐集によつて反映されて居る。彫刻は氏自身、其の家に置く場所の少い爲、比較的少しゝか集つて居らぬと云つて居るにも拘らず、東魏、天平元年（西紀五三四年）の銘ある觀音金銅佛、北魏、神龜三年（西紀五二〇年）の石碑。又イエツ教授が六・七世紀と見て居る法華經を題材とする石碑等、記念物的なものも多く、又盛唐の流麗なる作品こそ缺けたれ、唐以後の多くの名品に少くない。

ユーモルフ・プロス氏の繪畫蒐集中の逸品は、既に數年前大英博物館に寄贈されて今回の購入の中に入つて居ない。洛陽に近い廢寺に發見せられた約十三尺四方の觀音及び二菩薩を表はす壁畫、山西省も河南との境に近く發見せられたと云はれて居る、各々約九尺ばかりの高さの十四個の壁畫である。前者は唐末或は宋初と鑑せられ、後者も亦宋初と云はれてゐるものであるが、前者は特に記念物的な美しさを持ち、其の雄大さはビニオン氏が、法隆寺の壁畫にのみ譲ると激賞して居る。

尙此の二者を外にして、元明以後の壁畫數種及び吐魯蕃出土の壁畫斷片があり、他種の繪畫には百點に餘る支那畫、各數點の朝鮮畫及び暹羅畫を數へる。此等の中には特に云ふべきものを見ないが、唯漢代に擬せられて居る彩畫大甌の數片は既に其名を知られて居るものである。

因に、此の蒐集は、一九二五年より三十二年に至る七年間に全十一冊の豪華版に複製せられてアーネスト・ベンから發賣された。中六冊はホブソン氏が陶磁器を持ち、イエツ教授が銅器、玉、彫刻を三冊に、ビュン氏が繪畫を二冊に紹介して居る。(山田)

美術研究所時報

美術懇話會二月例會は二十五日、上野精養軒に於て開催し、左の通り講演を行った。
「日本庭園に就いて」 外山英策氏

寄贈圖書

日本鑄工史第一冊 香取秀眞著	香取秀眞氏
奈良帝室博物館繪畫圖錄 藤原時代第一輯	奈良帝室博物館
奈良帝室博物館歴史圖錄 第一輯	同
ダンテ神曲畫集 中山昌樹	富田美彦氏
National Årsbok, Stockholm, 1934.	National Museum
Catalogue of Books, Manuscripts and Other Articles of Literary, Artistic and Historical Interest, Illustrative of the Culture and Civilization of Old Japan, vol. 1—4.	侯爵 大久保利武氏

Grosse Bürgerbauten deutscher Vergangenheit, Leipzig, 1925.

富田美彦氏

Die schöne Heimat Bilder aus Deutschland, Leipzig, 1925.

同

圖 版 解 說

Deutsch-Süddolf in auserlesenen Bildern, Leipzig, 1926.

富田美彦氏

Bauten der Arbeit und des Verkehrs aus deutscher Gegenwart, Leipzig, 1926.

同

Deutsche Burgen und feste Schlösser, Leipzig, 1927.

同

建築雜誌 四九ノ五九四

思想 一五三

文學 二二二

アララギ 二八ノ二

帝國圖書館報 二七ノ八・九

ビタカ 二

史迹と美術 五〇

Bulletin of the Metropolitan Museum of Art, vol. xxx, No. 1.

Bulletin of the Art Institute of Chicago, vol. xxix, No. 1.

Bulletin of the Cleveland Museum of Art, Twenty-second year, No. 1

The British Museum Quarterly, vol. ix, No. 2.

Bulletin de l'École Française d'Extreme-Orient, Tome, xxxiii, Fasc. 1.

Iskustvo, No. 1—4.

Ostasiatische Zeitschrift, 10 Jahrg. Heft 5.

Berliner Museen, LV Jahrg. Heft 5.